

断熱性評価だけではない 複合的な外装材の評価をPRしていく

日本住宅モルタル外壁協議会
企画委員長 梅田 泰成氏に聞く

現在、日本住宅モルタル外壁協会(NiMoGa)では、外張断熱工法におけるラスモルタル外壁の仕様をまとめている。発泡プラスチック断熱材連絡会(PIC)からの依頼によるもので、カーボンニュートラルにおける住宅の断熱化を進める国交省の動きや省エネへの対応となるZEHの動きも加速しており、改めて外張り断熱工法の普及を図るうえでラスモルタル外壁の仕様を入れる試みだ。

そこで、今月号では日本住宅モルタル外壁協議会理事で企画委員長の梅田泰成氏に、外張断熱仕様の動きについて、その経緯と同協議会の今後の動きなどについて話を伺った。(編集部)

外張断熱工法への共通仕様を

モルタル外壁の断熱性について教えて下さい ―

そもそも、住宅の断熱性向上の目的は省エネです。国交省が建物の上位断熱等級を定め、これから建てられる建築物について全国で性能底上げを推しています。ただ、やはり問題となるのは寒冷地です。

協会側でも冷暖房効率を上げるために、北海道や東北地方での取り組みを重視していますが、建物の柱側の断熱性を上げただけでは足りませんから、付加断熱として外壁側にも断熱性をもたせる必要がでてきます。また、寒冷地は冬場の寒さに加えて、曇りや雨なども多く、施工する側としては工期が必要です。すると、モルタル外壁の採用は、どうしても躊躇せざるを得ない。ですから、西に比べて東は、モルタル外壁の付加断熱いわゆる構造躯体の外側に断熱材を張っていく事例があまりありませんでした。

たしかに全くやっていないわけではありません。ただ、それはサイディングと同様に、一度、縦胴縁を施工してからラス板を張ったものです。つまりモルタル外壁の標準工



▲「住宅の評価は断熱性能だけではない、放射や遮熱も含めて快適な住環境を提供していくことが重要ではないでしょうか」と語る梅田さん。

法というよりは、個々の工夫対応です。

今回の住まいの断熱評価の動きは全国区の話ですから、性能競争という側面が強く、実際の効果としてどれくらいあるのか。住まい手にとってどれくらいのメリットがあるのか。より実用性が求められていると思います。

これまで断熱性は考えられてこなかった ―

サイディングに関しては寒冷地での施工実績も多い。ところが、モルタル外壁に関しては各施工会社単位で個別に施工することはあっても全国展開となったときに共通する仕様がなない。それを纏めるべき組織というものがないといっても過言ではない。やはり、作業部門の話であって、仕様を事細かに示しているわけではありませんし、外張断熱は除くとまで書いてある指針もありますから。

ですから、建物の外側に断熱材を張って、それからモルタルを塗って、納まりはどうなりますかという相談をPICから受けました。断熱材メーカーとしてもモルタル外壁の納まりは分からない。それで、今回は外張断熱工法におけるラスモルタル外壁の納まりの仕様についてPICに協力していくという動きです。